HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	序； 凡例； 目次
Description	序の著者： 北海道大学総長 中村 睦男
Citation	北大百二十五年史, 通説編, ｉ－ｘｘiii
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28161
Type	other
File Information	hokudai125yr_tsuusetsu_jo.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大百二十五年史

通説編

序

北海道大学は、大学院に重点を置く基幹総合大学であり、その起源は、日本最初の近代的大学として一八七六(明治九)年に設立された札幌農学校に遡る。その後、東北帝国大学農科大学(一九〇七～一九一八年)、北海道帝国大学(一九一八～一九四九年)を経て、一九四九(昭和二四)年五月三十一日、国立大学設置法により新制北海道大学が設置され、現在、一二の学部、一四の大学院研究科、三つの附置研究所、三つの全国共同利用施設、言語文化部、附属図書館、附属病院などを擁する総合大学に成長するに至っている。

北海道大学は、二〇〇四年四月から国立大学法人法により国立大学法人北海道大学に設置形態を変えることになっており、大きな時代の転換点に置かれている。国立大学法人としての歩みを始めるにあたって、本学は、二〇〇三年九月十七日の評議会において、「北海道大学の基本理念と長期目標」を定めた。その内容は、一二七年に及ぶ歴史のなかで培われた「フロンティア精神」、「国際性の涵養」、「全人教育」および「実学の重視」という教育研究に関わる基本理念を再確認するとともに、二一世紀における知の創成、伝承、実証の拠点として発展するための長期的な目標を定めるものになっている。

クラーク博士の"lofty ambition"(高邁なる大志)という言辞を端緒とする「フロンティア精神」は、「学生及び教職員がそれぞれの時代の課題を引き受け、敢然として新しい道を切り拓いていくべきであるとする理想主義」を意味し、二一世紀に至り、学問におけるパラダイム転換や新たに提起された人類史的課題に応え得る研究を不断に展開するために、「学問の自由を基礎に、純理と応用の別を問わない創造性豊かな研究を推進するとともに、大学院組織等の柔軟な展開を通じて研究教育機能を飛躍的に発展させることにより、人類史的課題に応え得る世界水準の研究の推進を目指す」ものである。

設立当初の札幌農学校に顕著に開花していた「国際性の涵養」の理念は、「教養教育の充実によって自文化の自覚に裏づけられた異文化理解能力を養い、外国語コミュニケーション能力を高め、国際的に活躍できる人材を育成する」とともに、「学生及び教職員の国際性を涵養し、国際社会の発展に寄与するため、海外留学・研修の機会を拡大するとともに、外国人研究者・留学生の受け入れを積極的に推進し、アジア・北方圏をはじめとする世界の人々との文化的・社会的交流の促進を目指す」ことを要請している。

農業専門家の養成に止まらず、豊かな人間性と高い知性を兼ね備え、広い教養を身につけた人間の育成を図った札幌農学校に始まる「全人教育」の理念は、教養教育を重視する伝統として継承され、今日さらに発展させるために、「豊かな人間性と高い知性を涵養する幅広い人間教育を進め、自由・自主独立の精神の涵養と自律的個の確立を図るとともに、人権を尊重し、社会的要請に的確に対応しうる基盤的能力の育成を目指す」ことを目標にしている。

「実学の重視」という理念は、「現実世界と一体となった普遍的学問の創造としての研究と、基礎研究のみならず応用や実用化を重んじ研究成果の社会還元を重視する」という二つの意味を含みつつ定着し、さらに今日、「現実世界と一体となった普遍的真理や、北海道の特性を生かした学問の創造を推進するとともに、産学官の連携協働の拡大を通じて、研究成果を北海道、さらに日本、世界に還元する」ことと、あわせて「大学院における高度な専門家及び職業人の養成並びに社会人教育を充実させることを目指す」ことにつながっている。

北海道大学は、二〇〇一（平成一三）年に創基一二五周年を迎え、記念事業の一環として百二十五年史編集室を設置して、創基一二五周年を記念する出版物を編纂し、刊行にあたった。本書『北大百二十五年史』通説編の刊行によって、その別冊である論文・資料編（二〇〇三年三月刊行）とともに『北大百二十五年史』全二冊を構成し、既刊の小史『北大の125年』および『写真集北大125年』（それぞれ二〇〇一年三月および十二月刊行）を加えて、計画どおり百二十五年史編集室の仕事を成し遂げた。法人化にあたって北海道大学の個性と特色を明らかにし、教育

研究の水準をさらに高めて基幹総合大学としての存在意義を社会に示していくことが強く求められていることを考えると、『北大百二十五年史』の刊行は真に時宜にかなっているといえる。

北海道大学史の研究は、北海道大学百年史編纂事業において刊行された『北大百年史』全四巻および『写真集北大百年』に、今回の百二十五年史編纂事業による刊行物が加わることによって相当の蓄積を行うことができた。しかしながら、北海道大学史の研究はなおその出発点に立った段階であり、今後さらに継続的・多面的に発展させる必要がある。そのため、北海道大学文書館（仮称）設置検討ワーキンググループが二〇〇三年十月に提出した答申に基づき、「北海道大学の歴史に関わる各種の資料の収集・整理・保存・公開、及び調査研究を行うための機関」としての北海道大学文書館（仮称）を設置する方針を決定したところである。

本書の出版にあたってご尽力賜った、通史執筆者の方々、編集の任を務められた百二十五年史編集室の原暉之スラブ研究センター教授（編集室長）、井上高聡編集員はじめ編集室員、編集補助および編集顧問の方々に深く感謝するしだいである。

二〇〇三（平成一五）年十月

北海道大学総長　中村睦男

凡例

一、『北大百二十五年史』は、北海道大学の前身である札幌農学校開校（一八七六年）以前の事情から創基一二五周年（二〇〇一年）までを中心に記述し、通説編と論文・資料編の全二巻よりなる。

一、本巻（通説編）は第一部「通史」と第二部「部局史」の二部構成である。

一、文章の体裁等は、左記の諸項によった。

1　原則として当用漢字、現代かなづかいを使用したが、固有名詞・学術用語等を表記する際には適宜判断した。

2　紀年は西暦により、元号を表記する場合は（）に入れた。学年歴上の年度や会計年度も西暦で表示した。一八七二年以前の年月日は元号年をそのまま西暦年に置き換え、月日のみ太陰暦に従って表記した。

3　二〇〇二年三月より使用されている「看護師」「助産師」「保健師」等の呼称については、記述が改称以前の内容に止まっているため、混乱を避けて「看護婦」「助産婦」「保健婦」等を使用した。

一、第一部「通史」について

1　「通史」は、原則として創基一二五周年の記念式典が開催された二〇〇一年十月までの内容を記述した。

2　一九六八年までを記述した第一編は、『北大百年史』通説の「通史」の内容を圧縮し、適宜加筆した。

3　第二～四編は新たに執筆した。

一、第二部「部局史」について

1　「部局史」は、原則として二〇〇一年三月までの内容を記述した。

2　『北大百年史』部局史で記述した一九七六年までの内容は簡略に記述し、七七年以降の記述に重きを置いた。

3　「部局史」の項目は、二〇〇一年三月現在の北海道大学の組織に基づいて構成した。

北大百二十五年史　通説編　目次

序……北海道大学総長　中村睦男

凡例

第一部　通史……1

第一編　札幌農学校から北海道大学へ（一八七二～一九六八年）……3

第一章　札幌農学校の設置……5

第一節　前史……5

一　開拓使の設置　二　開拓使仮学校
三　様々な仮学校教育と女学校　四　仮学校の日常生活と主な出来事

第二節　札幌農学校の創設……13

一　専門科の開設準備と専門教師の招聘　二　第一期入学生と農学校の開校

第三節　札幌農学校の制度と施設……16

一　札幌農学校諸規則と教職員　二　施設の拡充
三　予科の設置と二期以降の生徒募集

第四節　札幌農学校の教育と生活……23

一　農学校の授業　二　課外活動　三　卒業式と卒業生

四　教師陣の交代　五　農学校とキリスト教　六　生徒たちの生活
第五節　開拓使廃止後の札幌農学校……32
一　開拓使の廃止と農商務省への移管　二　職制の変化と教職員
三　農商務省管轄下の農学校
第二章　札幌農学校の再編……36
第一節　北海道庁管轄下の札幌農学校……36
一　金子堅太郎の農学校批判　二　道庁設置と農園縮小
三　佐藤昌介の意見書　四　官制発布と校則改正
五　農芸伝習科の設置　六　兵学科の設置
七　外国人教師の雇用と日本人教師の育成　八　農園の拡張
第二節　文部省への移管……44
一　同窓会の農園経営　二　経費節減と官制改正
三　農学校廃止論の浮上　四　卒業生の動向
五　文部省への移管　六　維持資金の形成
第三節　札幌農学校の拡張……51
一　移管直後の農学校　二　各科の整理と増設　三　予修科の設置
四　拡張にむけて　五　施設・機構の充実と校則の改正
六　さらなる拡張　七　拡張実現の要因　八　教師や学生の活動
第三章　東北帝国大学農科大学から北海道帝国大学へ……61
第一節　北海道帝国大学創設に至る過程……61
一　大学設置運動の展開　二　東北帝国大学農科大学の概要
三　北海道帝国大学の設置　四　総合大学化の模索

第二節　大学運営の機構とその変遷……70
一　東北帝国大学農科大学の運営　二　北海道帝国大学の運営組織
三　各種規則の変遷
第三節　学生・生徒の生活と活動……76
一　学生の一年　二　学生・生徒数の推移と出身地
三　卒業生の資格・就職状況　四　学生の活動と社会運動
五　恵迪寮
第四章　戦中・戦後の北海道帝国大学……82
第一節　戦時体制下の大学……82
一　戦時体制と大学　二　学生の諸相　三　戦争への動員
第二節　敗戦直後の大学……93
一　敗戦と改革　二　学生の諸相
第五章　戦後の北海道大学……101
第一節　新制北海道大学への改組およびその後の拡張……101
一　新制北海道大学の構想　二　新制北海道大学の誕生　三　包括学校の終焉
四「移行期」における学部拡充　五「拡張期」における学部拡充
六　大学院の改組・拡張状況　七　学内研究施設の状況
第二節　新制北海道大学の管理運営体制……114
一　管理運営体制の整備　二　高瀬文相事件・イールズ事件
三　戦後の北海道大学長　四　事務局・学生部・学生委員会
五　農場・演習林の解放
第三節　教育・研究体制と学内の諸状況……117

一　入学試験と教養課程　二　教養課程見直しの動き
三　研究活動　四　教官・学生・大学院生・職員
五　学生の文芸活動　六　学生運動　七　学内行事

第二編　北海道大学の拡充（一九六九～一九八八年）……125

第一章　大学紛争……127
第一節　大学紛争の発生展開……127
第二節　北大紛争の特質と問題……128
第三節　北大紛争の原因……129
第四節　紛争後の改革の取り組み……132
一　大学が抱えていた課題　二　教養課程の問題

第二章　大学の組織・運営・環境の改編……135
第一節　大学の管理・運営……135
一　大学紛争後の大学運営　二　一〇〇周年記念事業
三　一〇〇周年後の大学運営
第二節　教育・研究組織の充実……139
一　環境科学研究科の設置　二　医療技術短期大学部の開設
三　学内共同教育研究施設の設置
第三節　学術情報システムの整備……142
一　「北海道大学計算センター」の発足
二　全国共同利用施設「北海道大学大型計算機センター」の発足
三　大型計算機センターシステムの変遷
四　学術情報システムとネットワーク

第三章　入学試験制度……147
第一節　一九七八年までの北海道大学の入学試験……147
第二節　共通第一次学力試験の実施……148
第三節　分離・分割方式の導入にむけて……150
第四章　教養部改革……153
第一節　教養課程の見直し……154
一　北大方式の見直し　二　教養課程の改革
第二節　教養部改革の検討……157
一　学科目の講座化　二　言語文化部の創設　三　〝教養砂漠〟
四　学生編成　五　総合科目（講義）の開設　六　教養課程教育協議会
第三節　教養部改革の実施……162
一　教育課程の改訂　二　教養部将来計画委員会
三　大学院重点化構想と一般教育
第五章　国際交流の推進……164
第一節　外国人留学生受け入れ体制の整備……164
第二節　海外の大学との学術交流……166
第三節　国際交流関係事業の整備……168
第三編　北海道大学の再編（一九八九～二〇〇一年）……171
第一章　大学の組織・運営・環境の整備……173
第一節　大学の管理・運営……173
一　変革の中の大学運営　二　総長権限の強化

第二節　教育・研究組織の整備……177
一　附置研究所、センターの改組　二　先端科学研究の推進
三　既存組織の協力・合併による改編
第三節　自己点検評価……180
一　自己点検・評価問題　二　自己点検・評価の実施
第四節　情報ネットワークの整備……183
一　第一期システム――HINES の誕生――
二　第二期システム――HINES スーパー情報ハイウェイ――
三　第三期システム――ギガビットネットワークの時代――
第二章　入学試験制度……190
第一節　分離・分割方式と大学入試センター試験……190
第二節　学部一貫教育体制と入学試験……192
第三節　開かれた大学と入学試験……194
第三章　大学院改革……196
第一節　大学院改革の前提……197
一　制度的枠組み　二　大学院学生数の変動　三　学位の種類と授与数
第二節　大学院改革整備構想……202
第三節　大学院重点化……204
第四章　全学教育……208
第一節　教養部の廃止……208
一　大学設置基準の大綱化　二　学部一貫教育体制への転換
三　一般教育等実施体制検討委員会の活動

四　教養部の廃止と高等教育機能開発総合センターの設置
第二節　全学教育の実施
一　全学教育実施体制の発足　二　全学教育委員会
三　全学教育検討委員会　四　コアカリキュラムの構築
第五章　国際交流の発展
第一節　留学生事業の推進
第二節　国際交流事業の推進
第六章　二〇〇一年の北海道大学
第一節　行財政改革と大学改革
第二節　新世紀における北海道大学像を求めて
第三節　一二五周年記念事業
第四節　北海道大学の現況
第四編　キャンパスの変遷
第一章　東京芝増上寺内の開拓使仮学校　一八七二～一八七五年
第一節　増上寺内への仮学校開設
第二節　札幌移転
第二章　札幌農学校北一条キャンパスの形成　一八七五～一九〇三年
第一節　札幌学校期の講堂・寄宿所
第二節　書籍庫・舎密所
第三節　本草園と植物園・博物場
213
220 220
227
233 233
236 242 243
249
251 251 252
253 254 256 257

第四節　農鬱園 …… 258
第五節　演武場と観象台 …… 259
第六節　開拓使廃止後の札幌農学校キャンパス …… 261
第三章　北八条キャンパスの誕生
（札幌キャンパス第Ⅰ期）一九〇三〜一九一八年 …… 262
第一節　キャンパスの移転と校舎建築の経緯 …… 263
第二節　東北帝国大学農科大学への改組と古河家寄付事業 …… 269
第三節　植物園および農場の施設整備 …… 272
第四章　札幌キャンパスの拡大
（札幌キャンパス第Ⅱ期）一九一八〜一九五九年 …… 273
第一節　スティックスタイルからセセッションへ――木造の時代―― …… 273
第二節　キャンパスゴシックとインターナショナルスタイル
――鉄筋コンクリート構造への転換―― …… 279
第三節　戦中・戦後のキャンパス …… 282
第五章　札幌キャンパスの変容と整備
（札幌キャンパス第Ⅲ期）一九五九〜一九九六年 …… 284
第一節　施設拡張期（一九五九〜七一年） …… 284
第二節　構内環境整備期（一九七二〜八五年） …… 288
第三節　施設の更新と高層化（一九八六〜九六年） …… 292

第六章　二一世紀に向けての札幌キャンパス形成　一九九六〜二〇〇一年 …… 294
第一節　「キャンパス・マスタープラン96」の策定 …… 295
第二節　「キャンパス・マスタープラン96」の位置づけと基本的考え方 …… 296
第三節　キャンパス計画と連動した施設整備 …… 298
第七章　函館キャンパスの変遷 …… 302
第一節　戦前の函館キャンパス――函館高等水産学校から函館水産専門学校―― …… 302
第二節　戦後の函館キャンパス――北海道大学水産学部―― …… 304
第八章　札幌キャンパスの地形と遺跡 …… 306
第一節　札幌キャンパス・ナビゲーター …… 306
第二節　地形と遺跡 …… 308
第三節　二つの地底世界――擦文文化と続縄文文化―― …… 310
通史参考文献 …… 313
通史執筆者 …… 321
第二部　部局史 …… 323
文学研究科・文学部 …… 325
第一章　北大文学部の歴史的事件――藤井事件――
第二章　文学部・文学研究科の改革
第三章　人と研究

教育学研究科・教育学部……385
第一章　学部創設から確立期まで
第二章　学部一貫教育体制に向けたカリキュラムの整備
第三章　教育研究組織の整備
法学研究科・法学部……403
第一章　学部発足から改組まで
第二章　教育・研究の新展開
第三章　開かれた法学部へ
第四章　大学院大学への道
経済学研究科・経済学部……423
第一章　大学院経済学研究科と経済学部の生誕
第二章　発展・拡充のみちのり
第三章　大学紛争と経済学部
第四章　経済学部の構造的改革と大学院重点化
第五章　経済学部教育の構造的改革と変容
理学研究科・理学部……451
第一章　理学部四六年小史
第二章　その後の二五年
第三章　大学院改革
第四章　現状と将来の展望

医学研究科・医学部……505
第一章　創基一〇〇年までの概史
第二章　一〇〇年から一二五年まで
医学部附属病院……563
第一章　北海道大学医学部附属病院概史
第二章　診療内科系
第三章　診療外科系
第四章　中央診療施設
第五章　薬剤部
第六章　看護部
第七章　登別分院
第八章　医学部附属病院の現状と展望
歯学研究科・歯学部……649
序章　歯学部の創設まで（一九二七～六六年）
第一章　学部創設期（一九六七～七六年）
第二章　学部充実期（一九七七～八七年）
第三章　学部改革期（一九八八～二〇〇一年）
歯学部附属病院……681
第一章　歯学部附属病院創設期（一九六七～七六年）
第二章　病院拡充期（一九七七～八七年）

第三章　病院変革期（一九八八～九六年）
第四章　病院改革期（一九九七年～）
薬学研究科・薬学部……699
第一章　医学部薬学科創設と薬学部昇格
第二章　教育・研究の改革と発展
第三章　大学院の重点化と医療薬学の充実
第四章　研究・教育活動の成果
第五章　二一世紀の発展に向けて――現状と展望――
第六章　附属関連施設の動き――附属薬用植物園――
工学研究科・工学部……729
第一章　工学部新設から北海道大学創立一二五周年に至るまで
第二章　新しい工学を担う新学科等の設置
第三章　既設学科のその後の発展と変遷
第四章　改革への助走――一九八五～九一年――
第五章　教育改革の時代（工学部から工学研究科へ）――一九九二～九八年――
第六章　新工学研究科・工学部の組織――大学院重点化後の姿――
第七章　開かれた工学研究科・工学部への始動
第八章　工学部再開発と新築計画
第九章　工学部と各研究センター
第一〇章　工業教育から工学教育、そしてエンジニアリング教育へ

農学研究科・農学部……799
第一章　通史
第二章　学科
第三章　附属施設
農学部附属農場……883
第一章　附属農場の展開（前史を含めて）
第二章　学内農場の縮小と整備
第三章　新たな組織改革の模索
第四章　現組織の改革
第五章　実習教育について
農学部附属演習林……899
第一章　基本財産から林業経営体へ（一九七六年まで）
第二章　新しい北海道大学演習林（一九八〇年代以降）
——長期計画の策定とフィールド教育・研究機関への展開——
第三章　近代的教育・研究機関へ発展する地方演習林
第四章　演習林の二世紀へ
獣医学研究科・獣医学部……925
第一章　学部独立前（農学部時代）
第二章　学部独立と学部の充実
第三章　獣医学部新館建設

第四章　六年制教育
第五章　大学院重点化
第六章　施設の新築・改修
第七章　獣医学部附属家畜病院（通称　動物病院）
第八章　国際交流
水産科学研究科・水産学部……949
第一章　水産科学研究科・水産学部
第二章　実験所・施設等の変遷
第三章　練習船――研究調査船・二〇〇二年三船体制から二船体制へ――
第四章　北水同窓会の歩み
言語文化部……1001
第一章　言語文化部の創設
第二章　教育の歩み
第三章　研究部門の充実
第四章　大学院設置
地球環境科学研究科……1025
第一章　環境科学研究科の理念と沿革
第二章　地球環境科学研究科の構想と沿革

国際広報メディア研究科……1037
第一章　国際広報メディア研究科の創設
第二章　教育・研究体制とその特徴
低温科学研究所……1049
第一章　創立から一九七六年までの低温科学研究所
第二章　各部門の研究概要（一九七七年から九四年まで）
第三章　改組（一九九五年）以降の低温科学研究所
電子科学研究所……1077
第一章　沿革
第二章　電子科学研究所の研究
遺伝子病制御研究所……1099
第一章　北方結核研究所の設立
第二章　北海道大学結核研究所
第三章　免疫科学研究所への改組とその後の歩み
第四章　免疫科学研究所と医学部附属癌研究施設統合による
　　遺伝子病制御研究所のスタート
触媒化学研究センター……1111
第一章　研究センターの概要
第二章　触媒化学の流れ

第三章　触媒研究所
第四章　触媒化学研究センター
スラブ研究センター……1123
第一章　準備期
第二章　法学部附属施設期
第三章　学内共同教育研究施設期
第四章　全国共同利用施設期
大型計算機センター……1137
第一章　設置の経緯
第二章　計算機システムの変遷
第三章　情報ネットワークシステムの変遷
アイソトープ総合センター……1149
機器分析センター……1151
実験生物センター……1153
遺伝子実験施設……1155
留学生センター……1157
第一章　留学生センター設立前
第二章　留学生センターの設立

高等教育機能開発総合センター……1171
第一章　予科
第二章　教養部
第三章　教養部の廃止と高等教育機能開発総合センターの設置
第四章　高等教育機能開発総合センターの発展
先端科学技術共同研究センター……1225
第一章　先端科学技術共同研究センター設置前史
第二章　先端科学技術共同研究センターの活動
第三章　北キャンパスにおける産学官連携機関の集積とセンターの改組
情報メディア教育研究総合センター……1233
第一章　前史
第二章　情報処理教育センター
第三章　情報メディア教育研究総合センター
総合博物館……1243
保健管理センター……1249
体育指導センター……1253
第一章　スポーツ・トレーニングセンターから体育指導センターへ
第二章　トレーニングの指導
第三章　研究活動・社会貢献

第四章　さらなる発展の鼓動
医療技術短期大学部……1259
第一章　通史
第二章　学科等
附属図書館……1273
第一章　図書館～創設から一〇〇年まで～
第二章　二一世紀をひらく図書館をめざして
事務局……1305
第一章　事務局
第二章　学生部
あとがき　北海道大学百二十五年史編集室長　原　暉之……1335
北海道大学創基百二十五周年記念事業実行委員会出版等専門委員会……1341
百二十五年史世話人会……1343
北海道大学百二十五年史編集室……1343